

## 『夢中間答集』刊行をめぐる一試論

—冒頭と文末の記述を手がかりに—

西 山 美 香

### はじめに

仮名法語集『夢中間答集』は日本印刷文化史上はじめて出版された仮名(片仮名)交じり文のテキストであるとい  
う。川瀬一馬氏は『夢中間答集』の出版について次のように述べている。<sup>①</sup>

夢中間答集は夢窓国師の生前に出版されている。これは中世における出版現象としては極めて珍らしい事例に  
属する。当時、書物の出版は殆ど仏典に限られていて、(略)然も著者の存命中に自著が刊行されるというよう  
なことは全く例外であった。いわんや仮名交り文の印行という点において夢中間答集の如きは、日本印刷文化史  
画期的な出版物と言つてよいのである。

『夢中間答集』は前例をもたない、まさに革新的、先駆的なテキストであった。西村惠信氏は先の川瀬氏の指摘を  
受けて、「何故にそのような希有なこと(『夢中間答集』の刊行)が起こつたかは、必ずしも偶然のことではなく、や  
はり深く夢窓その人の禅思想と関わつてくる問題であろう」と述べている。<sup>②</sup>(カッコ内筆者。)

本稿は、『夢中間答集』が何故そのような、先駆的なテキストとして世に送りだされたのか、それを世に送りだした

夢窓疎石の意図はどのようなものであったのか、そしてその背景にはどのような必然があったのかを、『夢中間答集』の冒頭と文末の記述を手がかりに探る試みである。

一

それではそれを考えるため、まず、『夢中間答集』のテキストとしての成立の経緯を確認してみたい。

『夢中間答集』は夢窓疎石（一二七五～一三五二）と足利直義（一三〇六～一三五二）との九三の問答からなるテキストである。『夢中間答集』の終わりから二番目の問答である第九二問答には、次のような直義の語が見られる。

問。日来相看の次でに問答申したることを、何となく仮字にて記し置たり。是を清書して在家の女性なむどの、道に志しある者にみせばやと存ずるはくるまじきやらむ。

この直義の語は『夢中間答集』が、夢窓と直義との実際、の問答をもとに成立したテキストであることを示している。夢窓と直義の二人の問答が本当に行なわれたことだったのか<sup>③</sup>、そして行われたとすればいつごろ行われたのかについて、現在のところ確たることはわかっていない。文中において、夢窓が三一歳のときの出来事を、「三十年の前」と語ることや<sup>④</sup>、直義に「今度義兵をおこされしことは、偏に仏法興行のためなりと承りしかば」と語ること<sup>⑤</sup>によって、夢窓が室町幕府に迎えられた後のことと文中からは推測される。

ただし、『太平記』卷二六「妙吉侍者行跡の事」に、「近来、左兵衛督直義朝臣、將軍に代つて天下の権を把り玉ひし後、専ら禪の宗旨に傾いて夢窓国師の御弟子となり、天龍寺を建立し、陸座・拈香の招請間なく、供物・施僧の財産目を驚かさずと云ふ事なかりけり。」とあることによれば、直義が尊氏に代わつて政権を握つた後と考えられ、その時期については『梅松論』は、「三條殿は六十六ヶ国に寺を一字づつ建立し、各安国寺と号し、同塔婆一基を造立して所領を寄られ、御身の振舞廉直にして、げにげに敷いつはれる御色なし。此故に御政道の事を將軍より御譲ありしに、

固く御辞退再三にをよぶといへども、上御所御懇望ありしほどに御領状あり」と書く。

この二つの資料を信ずれば、問答が行われたのは、安国寺・利生塔の建立が決定した時期と推測されている暦応元年（一一三三・八、九）以降、『夢中問答集』が最初に刊行されたこととされる康永元年（一一三三・二）以前ということになるだろう。すなわち、二人の問答が行われ、『夢中問答集』が刊行された時期は、直義が日本の政治をつかさどり、夢窓との共同の宗教的國家事業である、安国寺・利生塔及び天龍寺の建立を推進していた時期と重なっていると考えられるのである。

では当時の時代状況はどのようなものであったのだろうか。『太平記』卷二四「朝儀年中行事」は、当時の世相を次のように書いている。

暦応改元の比より兵革しばらく静まつて、天下無為に属すといへども、京中の貴賤はなほ窮困の愁ひを抱く。その故は、国衙・莊園も本所の知行ならず、正税・官物も運送の煩ひあつて、公家は日を逐つて狼戾せしかば、朝儀悉く廢絶して、政道さながら土炭に墜ちにける。

それ天子は必ず万機の政を行ひ、四海を治め玉ふ者なり。その年中行事と申すは、（以下年中行事の例をあげる）これらは皆代々聖主賢君の天に受け地に奉じ、世を静め、国を治むる枢機なれば、一度も断絶はあるべからざる事なれども、近年は天下の鬪乱によつて、一事もさらに行はれず。されば、仏法も神道も、朝儀も節会も曾てなき代となりけるこそあさましかりけれ。政道一事もなきによつて、天も災ひを下す事を知らず。かれども道を知る者なければ、天下の罪を身に帰して、己を責むる心のなかりけるこそうたてけれ。されば疾疫・飢饉年々にあつて、蒸民の苦しみとぞなりにける。

以上の記述によれば、直義が夢窓の弟子になり、問答を交わしていたと推測される時期は、一時的に戦乱は収まっていたものの、疫病がはやり、飢饉が続き、政は行われず、「仏法も神道も朝儀も節会もなき世」であったというの

である。そのような時代を背景に『夢中間答集』は刊行されたのであった。

## 二

それでは、直義の語によってその存在が示唆される、夢窓と直義の問答の筆録と、『夢中間答集』には、どのような違いがあったのだろうか。

筆録の存在をしめす資料は、直義の語以外には見られず、その存在自体確実ではない。しかし今は存在したと仮定して、現在は見ることができない筆録を想像してみると、その内容・形態を彷彿とさせる資料が、金沢文庫に残されている（以下、金沢文庫本と呼ぶ）。

金沢文庫本の内容の一部は、『夢中間答集』の記述と、共通している部分があり、夢窓の教えを記録したものであることはほぼ間違いないと思われる。よって、わたくしはこの金沢文庫本を手がかりとして、『夢中間答集』と、そのもとのなった（？）筆録との違いから、『夢中間答集』の特色について考えてみたい。

金沢文庫本と『夢中間答集』とを比較してみたとき、まず一見して気がつくことは、金沢文庫本が夢窓の言葉のみ、すなわち問答の「答」の部分のみを記しているの<sup>(8)</sup>に対して、『夢中間答集』は問答体になっていることであろう。

次に、さらに読みすすめていくと、金沢文庫本に記された夢窓の「答」は、それぞれには何の関係性も持たず、ただ書き足していったような形態になっているのに対し、『夢中間答集』は、「全篇九十三の問答は、各独立しながら前後脈絡を存し、而も浅深の次第を以て」<sup>(9)</sup>進む構成となっていることに気がつくだろう。

それでは、この両書の違いは何によって生まれたのだろうか。わたくしが考えるその最大の理由は、至極当たり前のことのようなはあるが、『夢中間答集』は出版されたということからもわかるように、公表を前提として、第三者、すなわち不特定多数の読者を想定し、一つのテキストとして編纂されたものであるということである。

先に述べた、金沢文庫本が夢窓の「答」しか記載していないのに対して、『夢中間答集』が問答体となっていることも、読者を意識した結果のあらわれの一つとも考えられる。

すなわち『夢中間答集』は、直義と夢窓との実際の間答をただ「清書」しただけのもの、とその当事者である直義によって語られながらも、実際は、読者を想定して、新たに創作されたテキストと考えることができるのである。

### 三

次に『夢中間答集』の間答の配列から、夢窓の『夢中間答集』編纂の意図をさぐってみたい。特に本稿では、テキストの冒頭と文末に着目したいと思う。何故なら、第三者（読者）の存在を想定して編纂されたテキストの冒頭と文末は、テキストの顔ともいえ、ある意味そのテキストの主張をもっともよくあらわす場所と考えられるからである。

まず第一問答をみてみたい。『夢中間答集』の冒頭を、夢窓は次のような第一声で語りはじめている。

世間に福をもとむる人、或は商賈農作の業をいとなみ、或は利銭売買の計ごとをめぐらし、或は工巧技芸の能をほどこし、或は奉公給士の功をいたす。其しわざは各ことなれども、其志は皆同じ。其ありさまを見に、生涯ただ身心を苦勞するばかりにて、其志のごとくに求得たる福もなし。其中にたまたま求め得て、一旦の樂みありといへども、或は火にやかれ、水にながされ、或は賊人にとられ、官人にうばはる。

この冒頭における夢窓の語りだしは、『夢中間答集』のまず第一の読者として、「商賈農作」「利銭売買」「工巧技芸」「奉公給士」を行っている人々、すなわち在家の一般庶民を想定していることを示している。

時の最高権力者である足利直義の帰依を一身に受け、その直義との問答を記録したとする『夢中間答集』において、夢窓の第一声が、誰よりもまず「商賈農作」「利銭売買」「工巧技芸」「奉公給士」を行っている、在家の一般庶民について言及するというこの冒頭が、ある驚きや異和感をもって受けとられたことは想像に難くないように思われる。

夢窓は、第一・二問答で、一般在家の人々について語った後、第三問答で「転輪聖王」の譬え話を用いている。

『悲華經』云、過去久遠劫に転輪聖王あり、無諍念となづく、(中略)かの無諍王及諸王子、広大の善根を修せらるるといへども、或は人・天・鬼・畜の報因となり、或は声聞・小乗の証果を得べかりしを、宝海梵志の勸によりて一念ひるがへせば、やがて菩提心を發得して皆成仏の記を得玉ひき。

たとひ末世なりとも、無諍王のごとく有漏心をひるがへして思惟觀察せば、何ぞ菩提心を發得する事なからむや。せめてそれまでではなくとも、聖教量にまかせて一善根を修しても、無上菩提に回向せば、必ず広大の功徳を成ずべし。かやうの人をば三宝護念し諸天保持し玉ふ故に、いまだ菩提を成ぜざる時も、或は浄土に生じ或は人天に居して、災難をほらふ心を生ぜねども、災難おのづから除り、福分をねがふ志はなけれども、福分ともしからず。

「転輪聖王」は在家の理想的な〈王〉のたとえとして、『法華經』安樂行品に登場し、日本でもさまざま作品にみることができる。<sup>10)</sup>すなわち、夢窓の語にある「たとひ末世なりとも」とは、夢窓と問答をする相手が直義であることを思い起こせば、「末世」の〈王〉、すなわち当時の為政者、〈王〉である直義へ語りかけていることがわかるだろう。

夢窓は第三問答で、「転輪聖王」の譬え話を通じて、直義にあるべき〈王〉の姿を説いていると考えられ、『夢中間答集』が公表を前提として編まれたとすれば、その実は読者に示していると考えられる。転輪聖王の譬え話が、第三問答という、冒頭近くの場所におかれていることは〈王〉についての自らの考えを示そうとすることも、夢窓の『夢中間答集』刊行の意図の一つであったことが見えてくるのではないだろうか。

そう考えると、『夢中間答集』が、夢窓と〈王〉たる足利直義との問答の形式をとりながらも、その〈王〉をさしおいて、一般庶民に言及するというその冒頭の特異性がなおさら浮き彫りになってくるのである。

『夢中間答集』の冒頭でえがかれる人々、すなわち「火にやかれ、水にながされ、或いは賊人にとられ、官人にう

ばは」れる人々とは、先に『大平記』でみた、天災と戦乱に翻弄される、当時の人々を念頭に置いて、夢窓が語っていることがうかがわれるのである。

『夢中間答集』の冒頭部は、『夢中間答集』が直義と夢窓とのプライベートな問答を単に記録したのではなく、「仏法も神道も朝儀も節会もなき世」における一般庶民と、(王)の、それぞれの(あるべき姿)を提示しており、彼ら在家の人々のために『夢中間答集』が刊行され、出版されたと読むことができるだろう。

#### 四

『夢中間答集』の冒頭における在家の人々の教化を図る夢窓の姿勢は、『夢中間答集』で説かれる夢窓の思想にもうかがわれるものである。夢窓は第二問答で、次のようにも述べている。

世間の種々の事業をなすとも、皆善根となるべし。若又其中において仏法を悟りぬれば、前になす所の世間の事業、ただ衆生利益の縁となり、仏法修行の資となるのみにあらず、即是不思議解脱の妙用となるべし。『法華経』に、「治生産業も皆実相にそむかず」と説けるは此意なり。

ここで夢窓は、たとえ出家していなくとも、日々の仕事が「仏法修行の資」「不思議解脱の妙用」であり、在家であっても悟ることができる<sup>11)</sup>と述べている。また、その夢窓の主張の根拠ともなっているのが、「治生産業も皆実相にそむかず」という一節であるが、この一節は第八四問答にもあり、夢窓は「若大乘の法理を悟ぬれば、世間の一切の語、一切の業、皆是了義の大乗なるべし」と述べている。

夢窓が『夢中間答集』で一番最初にその名をあげる経典が、すべての衆生の平等なる成仏を主張する『法華経』であることも、『夢中間答集』が在家の人々の教化をはかるテキストであることを示しているように思われる。<sup>12)</sup>

また、第七六問答では、夢窓は在家の人々について次のようにも述べている。

古人云、達磨西来して別に一法の人のために伝授するなし、ただ人々具足し、箇々円成する底を指出するのみなりと云々。既に人々具足といへり、何ぞひとり禪者のみ具足して、教者にはかけたりといはむや。ただ教者禪者のみ円成するにあらず、田夫野人の農業をはげむ処にもあり、鍛冶番匠の工巧をいとなむ処にもあり。要を取ていはば一切衆生の所作所為、見聞覚知、行住坐臥、遊戯談論の処、皆悉西来の玄旨にあらずといふことなし。何にいはむや仏の教へに随て種々の善行を修する人をや。

ここで夢窓は「ただ教者禪者のみ円成するにあらず、田夫野人の農業をはげむ所にもあり、鍛冶番匠の工巧をいとなむ所にもあり」と述べ、仏の教えに随つて種々の善行を修するすべての人間は、すなわち在家であつても、すでに悟つてゐることを認めてゐる。

このような出家者と在家者をめぐる夢窓の思想は、『夢中間答集』に引かれる譬え話の中の、出家者と在家者の描かれ方にもうかがわれる。『夢中間答集』のなかで夢窓が用いる譬え話の多くは滑稽譚であることをわたくしはかつて述べたことがあるが、出家者が笑われる話も数多くみることができる。本稿でそれらすべてを、紹介する紙幅の余裕はないが、譬え話のなかで、出家者がさまざまな間違いや悪行をおかしているのである（だからこそ滑稽なのであるが）。これらの滑稽譚は、話をおもしろくするための読者サービスと受けとることもできるだろうが、やはりここには在家であることが、出家者より決して劣るものではないという夢窓の主張がこめられているようにわたたくしには思われるのである。

夢窓は第十六問答において、次のようにも述べてゐる。

僧の破戒無慚なるを見てこれを誹謗して、我れは在家人なればかやうなるもくらしからずと思ひ玉へるは僻案なり、一生の報命つきて閻魔王の前に到り玉はむ時、此人は俗人なれば日來の罪業もくらしからずとて地獄に入ることを免じ玉はむや。(略)俗人は僧家のふるまひの正理ならぬを見て、誹謗の罪業をわすれ玉へり。僧家は又



俗人の誹謗し玉ふことは、我等が正理ならぬとがなりとはかへりみず、僧をそしり法をかるしめ玉ふひが事なりとがめ申さる。あはれげにうちかへして僧家の心をば俗人につけ奉り、俗人の心をば僧家にもち玉へることならば、濁世もやがて正法となりなまし。

夢窓の在家者と出家者をめぐる主張は、「僧家の心をば俗人につけ奉り、俗人の心をば僧家にもち玉へることならば、濁世もやがて正法となりなまし」という一文につきるだろう。そしてその在家者と出家者の隔たりをなくすという夢窓の主張の目的が、正法が流布する世にするためだということがわかるのである。すなわち、『夢中間答集』の冒頭からうかがわれる、『夢中間答集』の編纂・刊行の目的の一つは、正法の流布する世にすることと考えられるのである。

## 五

次に文末をみてみたい。夢窓は第九一問答では禅宗の相承の系譜をしめし、第九二問答では『夢中間答集』出版の目的を述べ、そして最後の問答である第九三問答では公案をしめして、『夢中間答集』の最後を締めくくる構成となっている。すなわちこれらの文末の問答群は『夢中間答集』の跋文のような役割を担っていることがわかる。

このように、跋文の役割を担う問答を文末に配列することも、『夢中間答集』が単なる問答の筆録を「清書」したものではなく、編纂した結果によるものであることを示している。

第九一問答は、禅の相承の系譜を示すことによつて、国家宗教としての禅宗の正当性を強く主張する内容となっているが、この九一問答の一部と共通する記述を持つテキストに、栄西の『興禅護国論』がある。この両書を比較してみると、『興禅護国論』が漢文で書かれ、朝廷に上奏する文体をもつのに対して、『夢中間答集』は仮名交じり文で書かれ、文末の直義の語によれば、在家の人々—特に女性—に向けて書かれた書となっている。ここに『夢中間答集』の特色をうかがうことができるだろう。<sup>14)</sup>

しかし、ここで考えなければならぬことは、当時僧侶の間で片仮名の使用は決して珍しかったわけではなく、むしろ通常に行われていたことであるということである。すなわち、今は見ることができない夢窓と直義との問答の筆録も、おもし存在していれば、おそらく仮名交じり文だったと推測される（事実、金沢文庫本も仮名交じり文である）。

ただし『夢中間答集』は確かに出版された本ではあるが、当時の出版事情（いわゆる五山版）を考えれば、大部数が出回ったとは考えづらい。夢窓が、「商賈農作」「利銭売買」「工巧技芸」「奉公給士」を行っている人々に、そして直義が「在家の女性」と言っているにもかかわらず、実際の読者の中に、そういう人々がはたして何人いたのか、わたくしには疑問に思われるのである。

すなわち『夢中間答集』の冒頭と文末で、夢窓や直義が一般庶民に言及するということは、必ずしも実際の読者層として彼らを想定していることとは限らないと思われるのである。（むしろ手にとってもらえれば、それにこしたことはないのであるが、それは当時の印刷の水準からいっても、また彼らの知識水準からいっても望むべくもないのである。）

しかし『夢中間答集』では「在家の女性のため」とわざわざその文末で念をおすように、強調されている。これはいったい何故なのだろうか。

第九一問答における直義の語が意味するところは、『夢中間答集』が、〈王〉である自分から、漢字、そして平仮名さえも不自由な人々、すなわち女性を含む庶民すべてが共有することができるテキストであるという宣言、言い換えれば、国家宗教としての禅宗の「正典」たらんとする宣言なのだとわたくしには思われる。

そしてそのことと夢窓が『夢中間答集』に仮名を用いたということは、密接に深く連関しあっているとわたくしには思われる。

## 六

『夢中間答集』が刊行された直後、康永四年（一三四五）に夢窓と直義の共同の宗教的国家事業であった天龍寺は完成し、その落慶供養は光厳上皇の臨席のもと、挙行されるはずであったが、比叡山延暦寺の猛反対のため行幸は延期されることとなった。天龍寺落慶供養への臨席に反対した山門側の反対は訴状として朝廷に上奏されることになったが、『太平記』で、山門の抗議状を詮議した公卿の一人、中院道冬は「たとひ山門申すところ事多しと云へども、肝要はただ正法・邪法の論なり」と述べている。禅宗は邪法として山門からの攻撃をうけていたのである。

夢窓は第九一問答において、次のように述べている。

教者の禅をそしるは禅を知らざるのみにあらず、教をも知らざる故なり。禅者の教をそしるは教を知らざるのみにあらず、禅をも知らざる故なり。（略）教者も禅をそしらむと思ひ玉はば、先づ禅の知識に参じて此宗旨を悟り玉ふべし。禅者も又教をそしりたく思ひ玉はば、先づ諸の教門の源底をつくして解了せらるべし。若然ば争論自然にやむべし。若互ひに知ずして面をあかめ音をあらくして争論せらるるとも、何れの時か勝負を決することあらむや。

『夢中間答集』における夢窓の教化の手法は、正法、すなわち夢窓が主張する禅の宗旨を、誰にでも読める仮名によって著述して刊行し、ひろくつまびらかにすることにあつたといえるであろう。そしてそのことだけが、当時の禅に対する反感を静めるものと考えていたことが推測されるのである。

そしてその夢窓の意図と、『夢中間答集』が仮名を用いた書として始めて刊行されたことは、無関係ではありえないのである。もともと文字自体、文字を知らない人々にとって、言葉を永く残すという点で畏怖の念をもたれていたのと同じく、印刷された文字、テキストが人々に与えた畏怖の念は想像するに難くないのである。夢窓と直義の語は印刷されることにより、永久にのこる語、すなわち、正しい語として、読者の心に深くきざみつけられることになったのではないだろうか。

夢窓は「仏法も神道も朝儀も節会もなき世」において正法を説くために、和歌や滑稽譚を利用した譬え話を駆使した平易な文章による、仮名法語集『夢中間答集』を編纂し、刊行を行ったのだと考えられる。そして夢窓が説く正法とは、「僧家の心をば俗人につけ奉り、俗人の心をば僧家にもち給へる事ならば、濁世もやがて正法となりなまし」と在家者と出家者を区別しないところにあり、その在家者とは(王)から女性を含む一般庶民までを含んでいるのであった。そのために、「在家の女性なむどの、道に志ある者にみせばや」という語が、直義の口によって、ほぼ文末である第九二問答で語られている。

### おわりに

『夢中間答集』の評価として、時代は下るが近世の黄檗僧である鉄眼道光(一六三〇〜八二)の『鉄眼禪師仮名法語』の奥書がある。鉄眼の弟子はここで、次のように述べている。

仏ののたまはく、方便の説をのぞいて、ただ仮名字をもて、衆生を引導したまふとなり。此国かなのもじをもちゆる事、西天の梵文にことならず。(中略)

されば禅宗はじめて此国につたはりよりこのかた、大和言葉をもて必要をのぶる人いくばくなし。わづかにただ無住禪師の沙石集、夢窓国師の夢中間答の書のみなり。

『鉄眼禪師仮名法語』の奥書は『夢中間答集』の評価する点を、仮名を用いている点においている。そしてそれこそがインドで梵字をもって教えを説いた釈迦の教えに沿っている、すなわち正しいことだと述べているのである。この奥書こそが『夢中間答集』における夢窓の意図のある部分を言い当てているのではないだろうか。

ただひたすら夢窓疎石が正法を説き、そしてそれを仮名を用いて記述した『夢中間答集』は、刊行されたことよって広く流布し、反論の書をうむこととなったが、ついに現在にいたるまで刊行されつづけ、読まれ続けることとなっ

た。そしてそれこそが、夢窓が『夢中間答集』刊行に意図していたことだったのではないだろうか。

注

- (1) 『古典資料類従5 五山版大字本 夢中間答集 付谷響集』勉誠社（昭和五二年四月）の「解説」。
- (2) 『夢中間答』をよみて、『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』三号（平成元年二月）。
- (3) 『太平記』巻二六「妙吉侍者行跡の事」は、「直義参られける時、国師宣はく、『日夜参禅、学道の御ためにて候へば何にも懈るところをこそ勧め申したく候へども、行路ほど遠くして、往還の御煩ひその恐れ候へば』と妙吉を遣わしたと記す。
- (4) 第六問答。「常州白庭」における出来事を指す。『夢窓国師年譜』によれば、同地に夢窓が滞在していたのは、嘉元三年（一三〇五）のことである。その出来事については、次の拙稿でも論じているのでご参照賜れば幸いである。  
『夢窓疎石における〈和歌〉と〈笑い〉——夢窓が利用しようとしたもの——』『フェリス女学院大学 日文大学院紀要』三号（一九九五年一〇月）。↓『禅文化』一六〇号（一九九六年四月）に注を省くなどの改稿の上転載。
- (5) 『夢中間答集』における『譬え話』——夢窓疎石が自画像に託したもの——『禅文化』一六六号（一九九七年一〇月）。
- (6) 『夢中間答集』は康永元年（一三四二）に一旦刊行され、その二年後の康永三年（一三四四）に出版の事情を詳述した再跋を付加して、刊行されたことが康永三年版の跋文より知られるが、康永元年版の跋文を持つ本が現存していないため、康永元年版の刊行を疑問視する説もある。
- (7) 『禅宗法語（仮題）』。『金沢文庫資料全書 第一巻 禅籍篇』（昭和四九年三月）に翻刻がある。同書の「解題」によれば、一卷二冊の南北朝時代の写本。同本は夢窓の他、明恵・無本覚心などの法語も収める。同文庫マイクロフィルムで確認したところ、虫食いがひどく読解困難な箇所が多い。金沢文庫本に草稿本性格がある可能性は、すでに同書の「解題」によって指摘されている。
- (8) 真言宗絵本山善通寺（香川県）にも『夢中間答集』と内容の共通性を持つ写本（内題「夢想国師ノ示論」、外題「修禅集

覧)が残されている。この本にも「問」はなく、夢窓の語だけが記されている。ただし、この普通寺本は『夢中間答集』と表記が酷似しているため、抜粋とも考えられる。今後調査を続けたい。

(9) 佐藤泰舜『夢中間答』岩波文庫(一九三四年八月)の「解説」。(2)の西村論文は、『夢中間答』を通覧すると、その内容は、一般に禅録といわれるものが、禅の第一義諦を掲げて純粹に禅の宗旨の何たるかを標榜するものの記録であるのに対し、むしろ、問答を組織的に並べ、現世利益に関する浅き疑問より始めてしだいに宗旨の根本へと深めて行き、最後に至って「問、如何なるか是れ和尚真実に人にしめす法門。答、新羅夜半に日頭明かなり」という本文の機語で全問答を一気に第一義のものへと昇華せしめている手法に、前例のない本問答の特色が見えるだろう」と指摘する。

(10) 『源氏物語』若紫巻で北山の僧都が光源氏に詠んだ和歌、  
優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそうつらぬ

の「優曇華の花」は、転輪聖王出現の瑞兆とされる花である。転輪聖王については、『河海抄』、河添房江『源氏物語の喩と王権』有精堂出版(一九九二年一月)、阿部泰郎「宝珠と王権」『岩波講座 東洋思想16 日本思想2』(一九八九年三月)、山本ひろ子『変成譜——中世神仏習合の世界——』春秋社(一九九三年七月)、伊藤聡「天照大神・空海同体説を巡って——特に三寶院流を中心として——」『東洋の思想と宗教』十二号(一九九五年三月)、小峯和明「中世の注釈を読む——読みの迷路——」『中世の知と学——注釈』を読む』森話社(一九九七年十二月)などを参照した。

また、佐藤弘夫『日本中世の国家と仏教』吉川弘文館(昭和六十二年三月)は、日蓮の著作において転輪聖王は、彼の国家観をあらわすものとして、重要な意味をもつと指摘する。

(11) 『法華玄義』卷三下(『大正藏』三三卷七一四ページb)。

(12) 夢窓は第一問答で須達長者の譬え話をしているが、その出典はあげていない。夢窓は『夢中間答集』において、『法華経』をたびたび引用している。そして、かの有名な龍女の成仏についても、第六〇及び八二問答で触れている。この『夢中間答集』が「在家の女性」のために出版されたことと語られることを考えあわせると、龍女の成仏譚が二箇所において引用されるのも興味深い。

(13) (4)に挙げた拙稿の他、「釈迦族滅亡説話が支えたもの——『夢中間答集』と『太平記』」「北野通夜物語」との比較から——『フェリス女学院大学 日文学大学院紀要』四号（一九九六年九月）を参照されたい。

(14) 柳田聖山氏は「采西の『興禅護国論』は、入宋の経験を通して、あらためて日本仏教の伝統を反省し、その将来を予見しようとする新しい歴史の書であった。」とし、「采西が『興禅護国論』を書いたのは、みずからの主張に対する、かれら撰閲家と山の仏教者たちの誤解を解くためであった。第二回目の入宋より帰った采西の活動と著述のもつとも重要な動機は、慈円を意欲してのことであったとおもわれる。采西は、慈円の『愚管抄』を読む機会なくして寂したが、慈円は采西を意識していたであろう。（略）采西とその『興禅護国論』、慈円の『愚管抄』にみえざる影響をあたえたとする。「采西と『興禅護国論』の課題」『日本思想体系16 中世禅家の思想』岩波書店（一九七二年一〇月）。

『夢中間答集』も、夢窓が日本仏教史におけるみずからの系譜をしめす点で、「歴史の書」的部分をもっているといえ、また何より堂塔の建立をすすめる点で、安国寺・利生塔及び天龍寺の建立に反対する山門への反論の書といえるだろう。夢窓はおそらくは『興禅護国論』を意識して『夢中間答集』を刊行したと考えられるが、『夢中間答集』が仮名によって記述されたのは、『愚管抄』を意識してのことなのだろうか。

(15) 天正本系は洞院公賢とする。

(16) 黒田弘子「ミミヲキリ ハナヲソギ——片仮名書百姓申状論——」吉川弘文館（平成七年三月）などを参照した。

(17) 浄土宗の僧、澄演（一二九〇?—一三七一?）は『夢中松風論』をもって反論し、夢窓はそれに対し、『谷響集』を刊行して反論した。また貞和五年（一三四九）に東寺の学僧、杲宝（一三〇六—六二）が著した『開心妙』を『夢中間答集』の反論の書と考える説もある。（原田正俊「中世後期の国家と仏教——禅宗の展開を通して——」『日本史研究』四一五号（一九九七年三月））。

〔補注〕本稿執筆後、村井章介氏より、平成九年（一九九七）九月一〇日にアメリカのオレゴン大学で行われた国際学術会議「Tools of Culture : Japan's Technological, Medical, and Intellectual Contacts in East Asia, 1100-1600」において、マーチン・ホルカット

氏が「Outer Learning in the Inner Sanctum of the Medieval Japanese Gozan: Musō Soseki and Chinese Buddhist and Confucian Learning」と題する口頭発表において、「禅思想の不徹底や権力志向のために低く評価されがちな夢窓の禅を、和文・和歌を意識的に用いることで日本に禅を根づかせようとしたとして肯定的理解しようとする」報告を行っていたことをご教示賜った（NHK学園日本史講座座機 関誌「れきし」参照）。ご教示賜りました村井章介氏に感謝申しあげます。

本稿は平成九年（一九九七）十一月十五日に行われた第六十八回禅学研究会学術大会（於：花園大学）における口頭発表を成稿化したものである。発表の機会をお与え下さり、加えて当日ご教導を賜った、諸先生方に心より感謝申しあげます。